

山西省澤州及び高平の石佛調査

道 端 良 秀

一 は し が き

山西省内には相當多くの未紹介の石佛がある。今回踏査出來たものだけでも、十有餘ヶ處の石窟佛、摩崖佛を數へることが出来る。然かもそれは多く六朝佛で、中に隋、唐、宋に下るものもあるが、兎に角かゝる多くの石佛が、未だ世にも紹介されずに居たと言ふことは、如何に支那奥地の調査が困難であるか、と言ふことを物語つて居ると共に、又この方面の研究に迄、まだ手が伸びて居ないと言ふ證據でもある譯である。

而してこれらの石佛は、勿論彼の雲岡の石佛、龍門の石佛、或は又天龍山の石窟佛等の大規模なものとは、到底比較し得るものではないし、且つ雲岡石佛の如く、完全に近い迄に保護もされて居ないため、或は風浪の爲、

或は盜壞の爲に、相當の被害を被り、全く見る影もない無殘な姿のものもあるが、然かしそれは美術史的價值、鑑賞的價值は減じて居るであらうとも、又その系統を知る史料的にも甚だ殘念な状態にはあるが、それでも尙佛教史の立場から、民間信仰の立場から、其他の方面から實に有力なる資料たり得るものである。

今こゝに紹介せんとする澤州及び高平の石窟佛及び摩崖佛等は、かゝる意味に於いて、一の資料を提供せんとするものである。これに關する綜合的研究は他日を期して、今は取敢へず、かゝる石佛の存在を世に紹介する程度に止めることとする。

二 澤州青蓮寺の摩崖佛

普通澤州の名に呼ばれて居る所は、即ち晋城縣で、近

年漸く開通した東潞線、即ち南同蒲線の太谷と祁縣の間の東觀鎮から分れて、遠く南下し潞安に至る線、この東潞線を下り、潞安に下車し、それより更に華北交通のトラックに乗つて南下すること凡そ五時間行程にして、澤州晋城縣に達するのである。石佛はこの澤州城より東南三十五支里峽石山青蓮寺と、更に縣城の北四十五支里の部村にあるのである。

この澤州を訪れたのは丁度昨年、即ち昭和十七年の九月二十三日の事で、暑い眞夏も終つて、調査には持つて來いの中秋であつた。潞安で特務機關の島津中尉や、華北交通の兵頭惠民研究所長の世話になり、各地への連絡をして頂き、澤州では部隊の八木中尉に萬事厄介になり、久保田首席參事、村上參事、宮嶺の神村隊長、泊村の杉崎副官其他將兵の方々などの御厚意によつて、兎に角この調査を無事に終へることが出來たのであつた。何と言つても皆この御厚意がなければ、どうすることも出來ない、匪賊出沒の何れも危険地帯であるからである。

二十三日に澤州に着し一泊し、翌二十四日は自動車の都合で、先づ更に前線の陽城縣を先きに調査すること、

してこれに向ひ、全くの山岳地帯、高原地帯に分け入つて、陽城縣の部隊に二泊し、附近を調査し、二十六日に再び澤州に返つて來たのであつた。

澤州附近では相當多くの行き度い處があつた。特に淨土教で有名な、淨影寺慧遠の遺蹟には何としても行き度い處である。其他二三箇所の石佛調査も遁せないものである。が何としても無理な日程な爲に、充分の日數が取れないことである。十月三日から太原に於いて、玄中寺復興の奉贊大法會やら、疊巒大師千四百年大法會を開かねばならぬし、その附設として、自分が責任を以て山西省佛蹟展覽會を準備して公開せねばならぬので、何としても充分の時間を取ることが出來ない。が出來るだけ有効に使ひ度いと、色々と頭をヒネつて日程を作つた譯だが、現地はこちらの日程通り行くものではない。特に青蓮寺は敵地區と言つてもよく、この調査は全く不可能と思はれたが、こゝだけとは部隊に無理を言ひ、日程も他を割愛して延期し、到々この澤州に一週間程頑張つて、どうかその機會を得て、青蓮寺調査の目的だけは達するを得たのであつた。

このためにこの附近の石佛は、只部村のそれだけに止り、他の方面はどうしても行くを得なかつた。そればかりではなく、高平縣で一泊調査の豫定が駄目となつて、そのまゝ僅か三時間位の調査で出發し、又長子縣や潞城縣、或は壺關縣や沁縣なども次回に延期せざるを得なくなり、法會をすませてすぐと思つて居た再度行も駄目となり、この方面の調査は遂に放棄せざるを得なかつたことは、返すくも残念である。然し殆んど不可能に思はれた、慧遠の遺蹟を尋ね得たことは、これ今回の調査行に於ける、最大收穫の一である。

この青蓮寺そのもの、調査行に就いては、別の機會に譲つて、今はこの青蓮寺裏の山腹、岩壁に二佛龕が造られて居ることを述べるに止めて置く。『山西通志』卷九七「金石記」九に

北魏古佛龕摩崖記 天復元年 今在鳳台縣硤石山

とあるのが即ちこの青蓮寺の佛龕である。然るに今この佛像を見ると六朝的なものは少しもなく、唐宋か宋頃のやうに見へる。成程その通りで、縣志によれば

此古佛一龕先無年號、缺藏禪師字^{缺二}記云、武定元年歲

次癸亥修畢、至唐天復元年十二月十七日、因鑄新像重記。

とある。即ち東魏時代に佛龕が彫られたが、唐宋昭宗の天復元年の終りに至つて、新像を鑄つて、銘記したと言ふのである。全く古佛龕が何處に在つたのか、全然跡方もない。只現存の唐佛龕の左方に、大きな佛の浮彫らしい姿が、微かに見へるが、それがそうではなからうか。頭部に當る部分が、穴になつて居てはつきり識別出来ない。

而してこの二佛龕が、或は一方の方が古佛龕ではなからうかと考へて見るが、二龕とも同じ作法であり、六朝佛とは考へられない。高さ三米位の處にある爲に、一寸計る譯にも行かぬし、その横に書かれて居る銘も殆んど不明である。纔かに天復元年十一月の文字と、南無阿彌陀佛の文字が見へるだけである。佛龕も小さなもので、座像の五尊佛、高さ半米もない小佛である。五尊佛とは脇侍に二菩薩像と二羅漢像の立像があるのをかく名付けて置く。尙青蓮寺には、少し山の下の方に古青蓮寺と書いた小堂があつて、彌陀の大像が安置されて居る前に、

頭部の缺けた小さな六朝造像碑があつた。「大齊乾元」の銘が見へるから、北齊時代のものに間違ひない。

三 郃村の摩崖佛

郃村は澤州城から北、即ち潞安に歸るバス道路を四十五支里程行つた、三家店より西に入つた處である。石佛は東郃村と西郃村とある、西郃村落から一キロと離れてないならうかな丘陵の、露出した岩壁に彫られて居るのが、即ち普通石佛嶺の摩崖佛と言はれて居るものである。

さてこの石佛嶺と言はれて居る佛龕は、全部四龕、高さ三米五十、横八米位の一大岩石の一面に、四龕を並べて彫り込んであるのである。石質は堅き石灰岩の爲に、割合に原形を保つて居るのは嬉しいが、佛龕何れも小さく、且つ僅か四龕だけでは、折角大勢の將兵の人々と共に、此處迄苦心して來たのに對して、頗る期待はづれがしたことであつた。

右端より一、二と番號すれば、第一龕は座像の一佛だけで、一見して古佛たる風格を示して居る。第二龕との間に銘があつたらしいが、殆んど分らぬ。案内人の背車

に乗つて、些細にこれを調べたが、全く摩滅して居て讀むを得ぬばかりか、文字の形すら不明で、纔かに「平」の一字が讀み取られた位である。「山西通志」の「金石記」九に、幸ひにも「石佛嶺摩崖記」として、この記事が出て居る。それを見ると、

石佛嶺摩崖記 永平中、今在鳳台縣浩村、鳳台縣志、浩村有石佛嶺、雕佛像數十。摩崖爲記、字多剝落、其文有日月麗天江河帶地、魏帝永平鄉飲淳風等八十餘字、永平宣武帝九年所改元也

とある。正しくこれに當るもので、これによれば、北魏の宣武帝の永平年間の造と言ふことが分る。今僅かに「平」の字一字が讀み得られるのは、正しく永平の平の字であらう。すればこの佛龕は北魏佛たるに間違ひない。

然し今この佛像を見るに、雲岡や龍門等で見ると、あの代表的な北魏佛の形式が何處にも見當らぬ。衣文にしる衣褶にしる、相好にしる、あの日本の法隆寺三尊佛に見る北魏風の特長は見出せぬ。衣は薄くびつたりと肌を包み、そのまゝ露らはに肌の線を露はして居る。右手は屈して胸にあて、手首は缺けて居る爲印相不明である。左

手は跏趺した膝の上に、降魔印をなして居る。珍しいのは右手首と、首とに飾様の輪が入れてあることで、この點菩薩像のやうでもある。顔は破損して不明である。衣は通肩であるが全くあるかなしかである。臺座は四角の須彌壇形で、龕は圓形舟形である。以上の如くこの佛像は明らかに印度のグプタ式を受けた、六朝の造像なることは、雲岡の石佛中にも見られる所のものである。座像の高さ六十糎位であるが、かゝる形式の六朝佛、全くグプタ式そのまゝの佛像は、今回の調査中、この佛像が唯一で、此點この佛像が色んな點に於いて、有力なる研究の一資料たるものであらうと思はれる。

次に第二第三の佛龕は、第一龕より左方に僅かの間隔を置いて造られ、龕の大きさは一龕より稍々大きく、二龕が八十糎四方であり、三龕はこれより稍々小さい位で殆んど同じ位である。従つてその佛像も、各れも座像であるが、高さはそれに相當したもので、こゝでは二龕共に、方座の上に座せる本尊を中心として、左右に寶冠を戴く二菩薩と、その脇侍の菩薩と本尊との間に、少し脊の低い羅漢を脇侍として居る。所謂五尊佛なのである。

この點上述の青蓮寺の唐佛龕と同一形式である。

本尊は方形臺座に跏趺し、兩手は前に置いて恐らく重ねた居り、衣は偏垣右肩で、その裾は長く垂れて、臺座の下迄覆つて居る。然しこれは六朝式の衣褶ではなく、圓く圓線のもので、矢張唐末を思はせるものである。頭髮は螺旋でなく、上に段ある結髪の覆髮形であるが、二龕共に御顔が破損して居て、面輪相好共に充分でない。

臺座の下の方には、この臺座の兩側に獅子が蹲踞して居り、この臺座から兩方に枝が出で、蓮華臺となつて、脇侍の菩薩が、この上に立つて居られる。而して拱が作られ、ゆるやかな尖拱で、その上部に飛天が二人相對して居る。が餘り巧みものではない。

以上は何れも二、三の兩龕の説明で、殆んど同じものであるが、破損の程度は第二龕がひどく、第三龕は全體にはつきりして居るが、第二龕の方が古拙であつて、三龕よりもよいやうである。二龕と三龕との間に銘があつて、これを見ると、「天祐十九年二月」の文字がある。唐末哀帝の時の年號で、天祐十九年は既に五代の後梁から次の後唐に遷らんとするの時であるから、これによつて

この佛龕が、五代に作られたことを知る。これには尙多くの文字が見へ、「功德寶王」云々とも見へるが、全然他は不明で、通志にも縣志にもこの銘は出て居ない。

次の第四龕は、第三龕をけづり取るやうにして、眞四角な浅い佛龕として造られて居る。大きさは又少しく小さく高さ七十四糎、横六十四糎のもので、これは座像の三尊佛である、非常に破損して居て、全體の相好も判然しない。拱も單なる線だけで、勿論天人もない。この左に銘があつて、これに「大宋端拱二年」云々の年號が見へるから、三龕より後る、凡そ六十有餘年の北宋の造龕なることに間違ひない。

以上四龕でこの石佛嶺の摩崖佛は終りであるが、僅か四龕の佛像が、北魏と唐と宋の三代に互つて、この小さな一岩石に彫られたと言ふことは頗る珍しいことである。勿論雲岡に於いても、龍門、天龍山に於いても、二代三代に互る佛像が彫られて居るが、何れも大規模のもので、かゝる小さな、一龕づつと言ふが如きものは餘り例がない。此點この石佛嶺が相當長きに互つて、社會の關心を引いて居たものであり、信仰的な據り處となつた

ものであらうことを示して居るものである。

案内人の村民の古老の話によれば、この佛像は今尙雨乞ひに、村民の信仰を聚めて居るとの事であり、以前にこの近くに崇壽寺なる寺が建てられ、この寺の石佛であつたとの事である。この寺は毀れて今村落の中に移されて居ると言ふ。

實はこの崇壽寺は縣志によれば、非常に古い寺で、北魏の建立とされて居るもので、この寺の項に石佛嶺の記事を載せ、「寺の西二里許りに石佛巖あり、又北魏、唐天祐、宋端拱の石刻あり」とあるのが即ち石佛嶺の佛龕なのである。何日頃移轉したのか、果して移轉したかどうか、今の所不明である。

四 郛村の崇壽寺

崇壽寺は村落の中央に在つて、實に堂々たる伽藍である。山門、四天王殿、釋迦殿、雷音殿が、一直線上に建ち並び、釋迦殿の兩側は地藏十王殿と、十八羅漢殿である。勿論關帝殿も娘々殿もあつて村民の信仰の對象となつて居るやうである。釋迦殿の釋迦大佛も、雷音殿の三

法身佛の大佛も、中々立派である。寺内に宋金元已下の石碑が残つて居るのに驚いたが、特に釋迦殿前の兩側に、三米五十位の立派な石經幢が立つて居たのには、豫期せざるこゝとて大いに驚いた。見れば左右兩幢は多少違つて居るが、何れも八角で、佛頂尊勝陀羅尼經を刻し、二重塔身で、右經幢は上部幢身に一面に小佛龕を彫り、左經幢は最下部の臺石の八面に佛龕が設けられて、小三尊座像が彫られて居る。何れも中々立派で佛龕の側に造主の名が刻してあるのが見へる。縣志には唐の開元中の經幢としてあるのは、正しくこれであらう。唐代の經幢として、こんなに立派に残つて居るのは稀であらう。年號不明で果して開元何年か、確定し得ないが、塔の裝飾などから見て唐代に間違ひないであらう。

歸らうとすると案内の一人が、奥にまだ何か石像のやうなものがあると言ふ。時間もなく出發間近になつて居るが、小走り乍ら行つて見ると、何んと一見、まぎれもない六朝造像碑なのである。一は高さ二米、幅七十糎、厚さ二十糎の沙岩石様のものゝ石質で、何ら龍首もなく上部からすぐ小佛像が彫られ、九體づゝ八段になつて居

て下部の方は五十五糎位の、座像三尊佛の佛龕が彫られて居る。これは完全に御首は備つて居るが、これ亦六朝とは云へ、上述の石佛嶺第一龕の石佛と同様、グプタ風を受けた、北魏佛と思はれる。

この造像碑は前面全部このやうに、石佛が鐫られて居るが、側面も同様に上部より下部迄小佛が刻まれて居る。裏面はどうなつて居るか、壁にくつついて居る爲に見るを得ないが、恐らく佛像であらうか、或は半分位に碑文でもあるか不明である。

もう一つの碑は、高さ一米十糎、幅五十五糎、厚さ三十四糎のもので、これは半分程普通の碑の龍首であつて、この龍頭の中央に佛龕を作り、二佛並座の釋迦多寶佛を彫り出だしてある。その下は六佛一段の小佛龕が、四段程あるが、下の方は非常に磨滅し、且つ眞黒くなつて居て判然しない。これは現に燭が燃され、線香が立てられ常に信仰されて居る爲に、線香の煙で黒くなつたらしい。石質はこの方は石灰質の堅い方である。これ亦側面も小佛龕があるが、下部の佛龕は三尊佛の稍々大きなものである。裏面は見るを得ないから、従つて年代も確定せず、

碑の因縁も知るを得ないが、こんな造像碑は珍しい方である。今回の旅行中に太原の博物館、開封の圖書館と、南京の博物館にかゝる同形式の造像碑を見た。何れも碑文が見えるから、今この兩碑も恐らく裏面に碑文が刻せられて居るのであらう。

元來この寺に、かゝる六朝造像碑があると言ふことは、何ら不思議ではなく、上述の庭内に残る古碑古幢によつても知るべく、且つその碑文によつて、この崇壽寺が北魏時代の古刹であり、唐宋に重複され、宋に於いて崇壽院の名額を賜ふたことなどによつて、この六朝造像碑も首肯し得るし、且つ又上述の石佛嶺摩崖佛との關係なども知るを得るであらう。

さてこの調査を一應すませ、潞安より来る定期バスに乗つて、今日中に澤州迄歸る豫定で、自分だけは晝食も抜きにして、走り廻つて居たが、さて道路に出てトラツクを待つたが、期定の時間が來ても中々バスは來ず、その中に遂に、今日のバスは豫定より早くこゝを通過したと言ふことが分り、一同がつかりしたが致し方なく、到々警備の人々何十名と共に、てく／＼と徒歩で歸らざ

るを得なくなり、従つて豫定も變更して、途中泊村の部隊に一泊させて頂く事となり、翌日晝過ぎにどうにか澤州に歸るを得たと言ふ仕末であつた。

五 高平の石窟佛

高平は澤州と潞安を結ぶ線の略々中間に位して居る城で、この石窟佛は更に縣城の北三十五支里、潞安即ち晋城縣との境界たる羊頭山麓にあるのである。羊頭山と言つても、バスはこの山を越へて往復して居るのであるが石窟佛は全くこのバス道路から手の届きそうな處にあつて、バスはこの石窟岩の眞下を走る譯で、トラツクに乗り乍ら充分これを見ることが出来る位置に在る。

さてこの石窟佛は、羊頭山腹の露出せる長方形の一岩石に開鑿された、二個の佛龕である。南東北の三面が露出し、西は山肌で、北側の露出面は高さ三米四十、横幅五米であり、東面は高さは北面と同じであるが、横幅は二米五十位のものです、長方形の堅い石質の岩石である。

この岩石に東西に一龕、南面に一龕と、二個の佛龕が鑿られて居る。

東面の佛龕は入口高さ一米六十、横一米十五で、窟内の大きさ、高さ一米九十、横幅一米九十、奥行二米二十である。窟内には正面は一米十位の坐佛に、脇侍菩薩の立像の三尊佛であり、左右の兩側には、何れも坐像三尊佛が彫られて居る。この左右の三尊佛は磨滅して判然しないが、正面の三尊佛は何れも首や手は缺けては居るが、全體が破損なく残されて居て、よく姿勢などを覗ふことが出来る。本尊は方座の上に跏趺坐し、右手は屈して胸に、左手は右膝の上に置いて居る。衣は通肩で、衣文は頗る古拙、條線を以て表はして居て、丁度天龍山の第八窟の坐像の隋佛を彷彿たらしめるものがある。然るに脇侍の菩薩の立像の姿は、衣文は前に十文字に交り、その下に降つて鋭角をなして居るのは、大同石佛の北魏脇侍菩薩のそれと全く同一である。三尊とも尖光隋圓の頭光がある。これらを見るとこの造像は、隋迄は下らず、恐らく北齊頃のものと思はれる。銘を探すも何處にも見えず、何かいたづら書きの線書きが見え、大王廟とか、正徳とかの字が読み得るが、正徳は明の時代で、この窟造立に何ら關係はない。

さてこの窟の入口の上部は、風化の爲判然しないが、尖拱のやうで、飛天が二人彫られて居るやうである。その上部に四角の穴が穿たれ、入口の上部兩側に小佛龕があつて、佛像が微かに見へる、上部の穴と穴との間にも小佛像が彫られて居る。一體この三個の四角な穴は何であらうか、こゝに柱を入れて堂宇が建てられて居たものゝ、跡なのであらうか、佛龕でもなさそうである。

次は南面の佛龕であるが、入口は高さ横共に一米十、窟内の大きさ高さ奥行き共に二米五十、横幅二米四十の殆んど眞四角の窟で、これは一寸變つた佛龕である。正面も兩側も入口面も、全面悉く小佛が鑿り込められた千體佛の窟なのである。萬佛洞とでも名付くべき窟内である。然かも珍しくも天井迄も一面に、整然と彫られて居ることである。大體十五段、天井迄數へると二十一一段、一段は二十三體から二十五體である。大きさ十纏の小佛で、立派である。勿論中に二個の稍々大きな佛龕があるが、これは明かに賢劫千佛の思想によるもので、大同石窟に見るものと全く同様である。

この南側の岩面は高さ二米五十、横三米五十位のもの

で、この窟の入口を中心として、周圍に亦一面に千體佛が彫り込まれて居る。これは窟内の千體佛より、一層の小佛で、二十數段になつて並んで居る。勿論風化して完全ではないが、その跡が中々見事である。右方に四角な浅い佛龕三個と、圓形のもの二個と見へ、坐像三尊佛が微かに見へる程度である。窟には斗栱の形も何もない。

この窟内にも何ら銘文はなく、只正徳□□年正月の文字が見へる。すると落書にしても、東面の窟と同じ正徳の文字が見へることは、この石佛が明の正徳年間に重修されたか、増修でもされたものであらうか。この石窟の北方に廟の毀れた跡があるが、恐らくこれと何らかの關係があるものであらうが、今の所全く不明である。「調査表」に千佛碑として、この石窟佛に關する碑文があるやうに出て居るが、これ亦不明である。

六 高平城内の北齊造像碑

高平城内には別に特別なものはないが、一個の立派な六朝造像碑が鼓樓の樓上に保存されて居る。「調査表」に「董黃頭七十人等造、北齊天保九年七月」とあるのがこれ

で碑文によれば大齊天保九年七月二十七日とある。原は鞏村の大廟にあつたが、盜まれて賣られたのを縣人がこれを縣圖書館に保存したものであると言ふ。見るに石質黒く堅く、高さ一米七十六、幅六十六、厚さ二十七、表裏兩側に佛像を刻して居る。

さて表の造像は頗る巧緻にして、上部は尖栱ある佛龕中に、三十二纏の坐像の釋迦像を中心に、二菩薩二羅漢の脇侍像を配して居る。一體この二菩薩二羅漢——恐らく阿難、迦葉の二人であらうが、かゝる釋迦五尊の形式は、北齊頃は盛んに造像されたやうである。それが只に北齊のみならず、隋から唐に迄及んで居る。平定縣石門口の則天時代の造像にも、前述の石佛龕の唐末造像にも、何れもかゝる例を見るものである。即ち小乗の羅漢、大乘の菩薩を代表せしめたものであらう。

而して本尊の四階段須彌壇形方座の兩側には、蹲踞の獅子を配し、それと同じ高さの栱柱の兩側には、左に半伽の菩薩思惟像、右には珍しく儒童本生譚の一場面、即ち燃燈佛に對して、儒童が自からの髪を地に布いて、佛の御足を汚泥より救つて、佛より將來釋迦佛となるであ

らうと言ふ記別を授つたと言ふ本生譚が語られて居る。即ち儒童が地に伏せて髪を布き、その上を燃燈佛が歩いて行く姿が彫られて居る。この本生譚の思想、布施の思想は當時相當識者の間に深き感銘を與へて居たらしく、北齊の文宣帝が法上に對しても亦、自から布髮の禮を取つたと言ふが如き事實となつて現はれて居る。一國の主權者、支那に君臨せる專制的な北朝の國家に在つて、皇帝が自から屈して比丘に佛弟子として、佛と同等の價值を認めて、こゝに最大の功德を得んとしたことは、北朝佛教の一特殊事例ではあるが、又以て北朝佛教の一面を知る一資料であらう。

さてこの五尊佛は、尖拱の佛龕であるが、更にこの尖拱の上に、丁度拱の尖つた所を臺座の如くして、座佛が彫られて居る。この座佛の佛龕は、とても複雑化し裝飾化された拱で、天蓋式であり、帳幕が彫られて居て、拱柱は太く、四角な拱門に、半圓形の佛龕を彫り出したものである。この拱龕は北響堂山の石窟寫真中に、特に唐龕碑龕などに見られる所である。尙この拱柱の左右に、上下二列に四人の供養僧と見へるものが、佛龕に向つて

合掌して居る。而してこの上下二龕の佛像は、何れも碑の龍首の部分に彫られて居るもので、佛龕の他の空間は巧みに龍の足などを配し、或は尖拱の兩端を模様化などして居る。

次にこの碑身とも言ふべき處は、四段に區切られて居て、上の三段は何れも線畫的に供養者の像を畫いて居る。然かもその側に何れもそれが布施者の名を刻み込んで居る。それを見ると、「佛殿主廣固妻李迎思」、「教化主董京」、「四面像主前郡錄事韋包龍」、「菩薩主王寶」、「阿難主董思云々」、「菩薩主前高平縣功曹楊茂並妻」、「定光像主劉廻」などを初め、起像齋主、大像主、迦葉主、思惟主、彌勒像主、都邑主、開明主、供養主などの名が見へる。當時の造像に關係する人々の名と、造られた像の性質を知ることが出来る。四段目の下部は造像の因縁の銘が書かれ、董黃頭等七十有餘人が、皇帝已下一切の含靈の爲に造像せる因縁を記して居る。

次に裏面であるが、こゝには龍首の部分には尖拱佛龕が造られ、その中に雲岡石窟やその他によく造られる、法華經所依の釋迦多寶二佛並坐の像が彫られて居る。こ

は只一佛龕だけで、この佛龕の下、即ち碑身の最上部に、一段六佛の坐像が、小佛龕の内に彫られて居る。何れも尖拱龕である。而してこの小佛の下は全六段に分たれ、一段六人づゝの供養主の繪像が彫られて居る。

この内この小佛龕像六體は、すぐその下にも像主供養像と共に名を刻して居る。右方から見れば西方像主、北方像主、釋迦像主、多寶像主、南方像主、東方像主と書き、二段目は都菩薩主、大佛都主、上方像主、下方像主、光明主、都供養主とある。これにて佛像の名を知ることが出来る。已下は維那、邑子の名である。又側面にも坐像三尊佛の一佛龕が彫られて居る、四面造像碑なのである。

七 結 語

石窟の開鑿、摩崖佛の造立は、北朝治下に於ける佛教の流行であり、北朝佛教を物語る一大特長たり得るものである。青蓮寺に於ける、石佛龕に於けるこれらの摩崖佛は、何れもかゝる風潮に棹した一事象に過ぎない。雲岡の大石窟が、如何に後世の人々に造像功德のすばらしさを教へたことであらうか、龍門石佛の造立が、一般社

會に如何なる影響を與へたかは、山西省内に現存する多くのこれらの遺蹟によつても視ふことが出来る。

石佛龕の佛龕の右方の一岩石に、この佛龕開鑿は當時の雲岡石窟に刺戟されて造られたことを記して居ることはその一例であらう。この佛龕の出来た永平の年は、宣武帝の時で、既に洛陽に遷都した北魏は、新たに龍門に於いて、堂々たる大石窟を起して居た時である。澤州は舊都北臺平城の都から、新都洛陽への通路に當り、従つて文化の幹線をなして居る處であつて見れば、かゝる石佛が造られると言ふことは當然の事であらう。尙詳細に踏査すれば思ひがけざる遺蹟を見出すかも知れぬ。今は只ノートによつて自分の調査せるものゝみ紹介するに止めて、一應の中間報告となして置く。